

12. 石動山信仰と越中との関係

はじめに

本稿は論考であり、論文であって、調査報告書にふさわしくないものである。にもかかわらず敢えて、この貧しい論考をこの調査報告書に載せたのは、次の理由による。

一般に、石動山は能登に属するものであって、越中とは関係のないものだと思われているが、そうではなくて、越中とは深い関係があることを論証したいからである。もとより未熟なものであり、論証整わず、推論・假説・臆測に満ちているが、大方の御批判をいただき、討議討論の材料としてもられれば、幸甚に存ずるものである。

小 目 次

1. 石動山と越中の結びつき
 2. 石動山信仰はどうして起ったか
 3. 越中における石動社の分布
 4. 小矢部市における石動山信仰
 5. 石動山ゆかりの古寺

1. 石動山と越中との結びつき

石動山は大昔から「能登石動山」「能州石動山」と呼ばれてきており、能登専属の山と考えられてきた。事実、行政区割から見ると、明らかに能登国（石川県）に属している。

しかし、地理的・歴史的によく吟味してみると、石動山は半ば越中の山といってよく、石動山と越中とは甚だ密接な関係にあり、強い結びつきを持続してきたのである。以下、その事情を考察しよう。

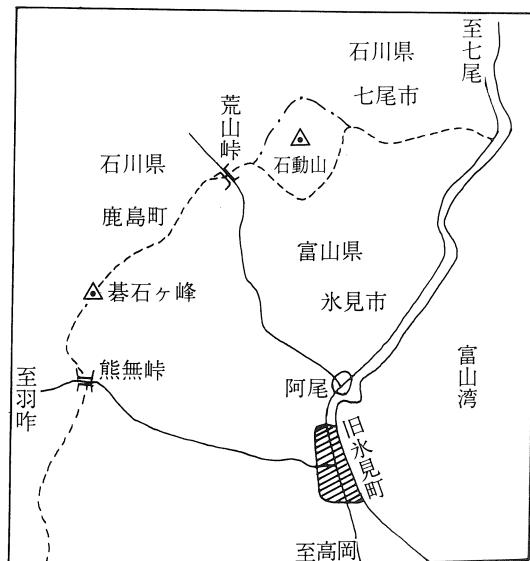
〔第1〕 地形的に見ると、石動山は能越国境を走る山脈（宝達山脈または石動山脈）の分水嶺上にそびえており、能登と越中とに両属しているといえよう。富士山が駿河と甲斐の国境にありながら、「駿河の富士山」と呼ばれているのに似ている。

石動山の北側に降った雨は七尾湾に注ぎ、南側に降った雨は氷見地方—富山湾に注ぐ。それなのに、なぜ石動山は石川県の行政区域に入ったのか。

地図を開いてみると、富山県と石川県との境界線は、氷見市の西北方（熊無峠—碁石ヶ峰—荒山峠）では直線に近いながらかなカーブを描いているが、石動山付近では三角形の折線となり、三角形の一角が富山県側へ鋭くわりこんでいることが目につく。これは、古来、石動山の伊須流岐比古神社の社地（天平寺の寺域）が50町四方と定められていたことによる。この神社は延喜式内社とし

て能登国43座の中に明記されており、天平寺もまた「能登の天平寺」であった。それでその社地（寺域）50町四方が能登国（石川県）に帰属するのは当然であり、県境線が三角形をなして富山県側へ鋭くわりこんできたのである。

(但し、今日の五万分ノ一地形図で検すると、この社地・寺域は50町四方ではなく、30町四方ほどのようである。深山幽谷の多い険しい山地であるから、平地のような正確な測量は出来ない。50町は約 5 km)



50町四方といわれた社地の地図

〔第2〕 石動山の北側（能登側）はすこぶる急峻で、寺院や僧坊を建立する余地は全くないのに対し、南側（越中側）は極めてゆるやかで広い台地があり、大小多数の堂塔伽藍や58坊といわれた僧坊は、みな越中側台地に建立されていた。しかも五社権現の神殿や、天平寺の堂塔伽藍は、ほとんどみな南面（越中向）して建てられた。五社権現の神様も天平寺の仏様も、みな越中の方を向いておられたのである。

〔第3〕 石動山は参詣路は7口あったといわれるが、その中で表参道といわれたものは、古代中世では越中口（大窪口）であり、近世（江戸期）になってから二宮口（能登）にかわった。どうしてこうなったのか。古代中世の石動山の勢力範囲を考えれば、その理由は判明する。

周知の通り、石動山は古来から勅願所として、皇室はじめ衆庶に尊崇せられ、加賀・能登・越中・越後・佐渡・信濃・飛驒の7カ国を産子区域とし、知識米勧進地域に認定されていた。それでこの7カ国へ石動山から知識米勧進僧が毎年廻国に出発した。これらの国々から多数の修験者（山伏）・社人をはじめ、一般の庶民信者が続々として石動山に登山参拝した。

これら7カ国の修験者・社人・衆庶はどの参詣路をとったのであろうか。越中・越後・佐渡・信州・飛驒の5カ国の参詣者は、地理的に見てすべて越中側から登ったに違いない。能登側から登ったのは能登1国のみであった。（加賀は白山の膝元であり、白山信仰が強く、石動山へ登る人は稀であったという。）してみれば、能登側登山路はさびれており、越中国側が繁昌して表参道となつたのは当然のことである。

それでは近世になって、越中側がさびれて裏参道となり、能登側が繁昌して表参道となつたのはなぜか。それには二つの理由が考えられる。

① 『石動山來歴』という旧記によると、「往古は北陸道7カ国の社人が、毎年500人あて、3月24日の祭日には当山へ登り、奉拝し神樂を奏した。中古まで7カ国の社人が当山にて官位を取得したが、天下統一後は京都の吉田家にて沙汰することになったので、只今は御祈禱の時分にも社人共は登山仕らず、当山の両神主ばかり御祈禱を相勤めている。」と記している。7カ国の社人500人が毎年3月の祭りに参詣したというと、誇張に聞えるかもしれないが、江戸時代及びその後の各宗大本山の法要や、天理教や大本教の大祭に、何千人何万人の人々が群参することを思えば、あながち誇張とも言えまい。しかるに近世になって天下統一されると、神社界も吉田家によって統制され、社人の官位が京の吉田家で沙汰されるようになり、7カ国の社人は石動山へ来なくなつた。

② 平安・鎌倉時代から室町時代前半にかけて、日本佛教は主として天台宗・真言宗で占められていた。従って真言宗の石動山は衆庶の信仰を集めることができた。しかるに室町時代後半（戦国時代）から一向宗（浄土真宗）をはじめとして、浄土宗・日蓮宗・禪宗などの新佛教が北陸地方に普及し、人心に浸透していった。各宗僧侶は捨身の行を以て布教に努めたので、民衆は地元の新興佛教寺院に参詣し、その僧侶の法話説教を聴聞して充分に満足した。之に反して、比叡山や白山や石動山の旧佛教の法師達は、民衆に接近し親密化し懇々と法を説くことをせず、武装して僧兵となり、闘争戦争をくりかえした。庶民・大衆はますます旧佛教を嫌悪し、疎遠となり、はるばる遠方の石動山に参詣する人々は減少していった。

かかる傾向に対して石動山衆徒たちは、北陸7カ国の産子たちを引きつける魅力ある布教方法を講ずる努力を怠った。そして信者参詣者の激減を、権力者（朝廷と加賀藩主）に結びつくことによってカバーしようとした。その最も有効な方法は、天皇の玉体安穏、藩主の武運長久を祈願し、その巻数を奉納することである。そのほか年頭とか五節句とかの折目折目に、大量の進物を携えた御氣嫌奉伺の使僧が、京・金沢へ赴いた。そのために京・金沢への往来が頻繁となった。それに最も便利な道は能登側の二宮口であることはいうまでもない。そして越中口は著しくさびれていったのである。

表参道となつた二宮口の入口には、「石動山本社迄徒是五十八町」と筆太に彫刻した大型道標が建立された。これは文政3年（1820）に、前田土佐守から寄進されたもので、高さ6尺、幅2尺、台石の高さ1尺、その幅3尺四方の大きなものである。58町というのは、二宮口の入口から山上の大宮坊までが50町、そこから頂上の大御前の石動権現本社までが8町、合計58町であった。

また二宮口参道の終点には、表門たる仁王門が建立され、その前に下馬札が立てられていた。

〔第4〕 石動山隨一の行場たる八大山（八代仙とも書く）岩窟が越中国氷見郡の角間山中にあった。これは石動山をはじめて開いた法道仙人が參籠した靈地とされており、「石動山の奥の院」と称された。元禄10年の石動山古地図には、「八大山、石動山權現奥ノ院、岩屋ノ口拾三間、ふかさ七間、高さ一丈、御内に不動尊御座候」と注記してある。岩窟は惜しい哉、大正時代におこった能登地震の際に崩壊してしまったが、今でもその付近は深山幽谷で、断崖あり飛瀑あり、密林あり溪流あり、森巖の気に満ち満ちており、行場としては最適の所と思われる。石動山は元来、修驗道の道場として開かれた山といわれる。修驗者はこの山中に籠り、溪流に禊し、滝に打たれ、野天に寝たり、断食したり、山菜をとって食べたり、回峰行をしたりして、身心を鍛錬して驗力を身につけた。なかんづく幽闇の洞窟に入つて坐禅をつづけ、一心に本尊（不動明王や虚空蔵菩薩など）を念じつづけると、やがて仏神を感じし、仏神と同化するに至る。これこそ山中修行の総仕上げであり、画龍点睛である。弘法大師が青年の頃、四国室戸岬の洞窟に籠った時、明星が天空より洞内にとびこみ、空海の口中に入り、忽ちにして虚空蔵菩薩が示現したという話が想起される。それほど洞窟修行は修驗道では大切なのであるが、石動山内には八大山のほかに適當な洞窟がなかった。さればこそ八大山は「石動山の奥ノ院」として特別に神聖視され、越中氷見郡角間村の山中にありながら、能登石動山の飛地として扱われてきたのだという。

八大山（八代仙）は石動山の院内より南下すること6kmほどの所にある。古地図を見ると、ここに至る山道には「八大山道」と注記してあり、往昔この道を石動山衆徒が頻繁に往復したことが想像される。

〔第5〕 越中には石動彦神社の分霊社が多数祀られており、過去において越中の石動山信仰がいかに盛んであったかがわかる。このことについては項を改めて記そう。

〔第6〕 前述の如く、近世以降は石動山信仰は衰退し、参詣者は激減したが、それでも氷見地方から参詣登山者は途絶えなかった。それは主に灘浦海岸地方からの参詣者であるが、それは現代にもつづいている。その理由として次のことが考えられる。

- ① 石動山に近くて、親近感があり、登拝参詣に便利であること。
- ② 灘浦地方の佛教は、北陸一般と同じく真宗が多いが、その中で禪宗（曹洞宗）と日蓮宗檀徒が比較的に多く、集団的に分布している。禪宗や日蓮宗は、真宗と違って諸神諸仏の信仰を排斥せず、寛容に認める傾向がある。そのため石動山信仰を忌避せず、親愛の情をもって受け入れたのだと思われる。
- ③ 近世300年にわたり、石動山には58坊があったが、そのほかに神主として清水家と大森家とがあり、専ら石動山の五社権現の神事を奉任してきた。この両神主家は石動山五社権現の神事のみでなく、山麓地帯の村々の神社にも奉仕してきた。もちろん山麓全体の村々ではないが、灘浦海岸の村々の神社（宇波・脇方・小境・大境・姿・中田・中波・脇）は、今も清水宣英氏（石川県鹿西町能登部居住）の奉仕社である。他に白川・戸津宮・長坂・平・五十谷の各村は、上水和夫氏（長坂居住）の奉仕区域であるが、上水家は清水家の分家であるという。清水家は昔も今も伊須流岐比古神社の宮司であり、兼ねて灘浦海岸各村の神社の宮司である。こうして清水家と灘浦各村とは、近世300年と、明治以後100年と、数百年にわたり、緊密な精神的なつながりを保持してきたのであり、清水神主の主宰される石動山の祭典には、毎年必ず十数名の村人が参詣登山したのである。清水神主家は曾て「清水丹波守」と称された時代があり、今に至るまで「丹波様」と呼ばれ、氏子衆の敬慕尊敬の的となっている。
- ④ 石動山は漁業と関係深く、漁民にとって石動山は甚だ重要な山であり、親近感をもって仰がれていること。（このことについては、別項に詳述する。）現在、石川県鹿西町の能登部神社（清水宣英宮司）において、毎年11月17日から21日まで、「ばっこ祭」という神事がとり行われる。この祭典には灘浦漁場でとれた大鰐が奉納される慣例となっている。その由来については、江戸時代に石動山が繁栄していた頃、灘浦の大網主から石動山上の五社権現の祭典に大鰐を奉納し、大漁祈願をしてもらった慣例があった。それが明治維新に石動山が瓦解したので、大鰐奉納行事は清水神主の本務社たる能登部神社へ移管されたのだとう。このような伝統的な奉納行事を見ても、石動山と灘浦漁業との深いかかわりがわかるであろう。（大鰐奉納行事について129頁に詳述）

2. 石動山信仰はどうして起ったか

石動山信仰がどうして起ったか。またどうしてかくも盛大になったか。これはまことにむつかしい問題であり、衆智を集めて討論すべきことであるが、将来の共同討議の資料として若干の私見を述べてみよ

う。問題提起として御検討いただきたい。

① 石動山は高さ 565m の山で、さほど高い山ではない。しかし能登半島基部では最高の山であり、よく目立ち、しかも、山頂部が円錐形をなしている。円錐形の山は、富士山をはじめとして、藏王山・月山・鳥海山・筑波山・三上山・大和三山・愛宕山・相模大山・高千穂峰など、「神体山」「神名備山」とされて崇拝されてきた。円錐形の山は天に向ってそそりたち、天上にまします神々が地上に降臨されるのに便宜な山として神聖視され、やがて神靈の鎮まる山として崇拝されるようになったようである。石動山の頂上に、古代から延喜式内伊須流岐比古神社が祀られているのは、その証拠であろう。

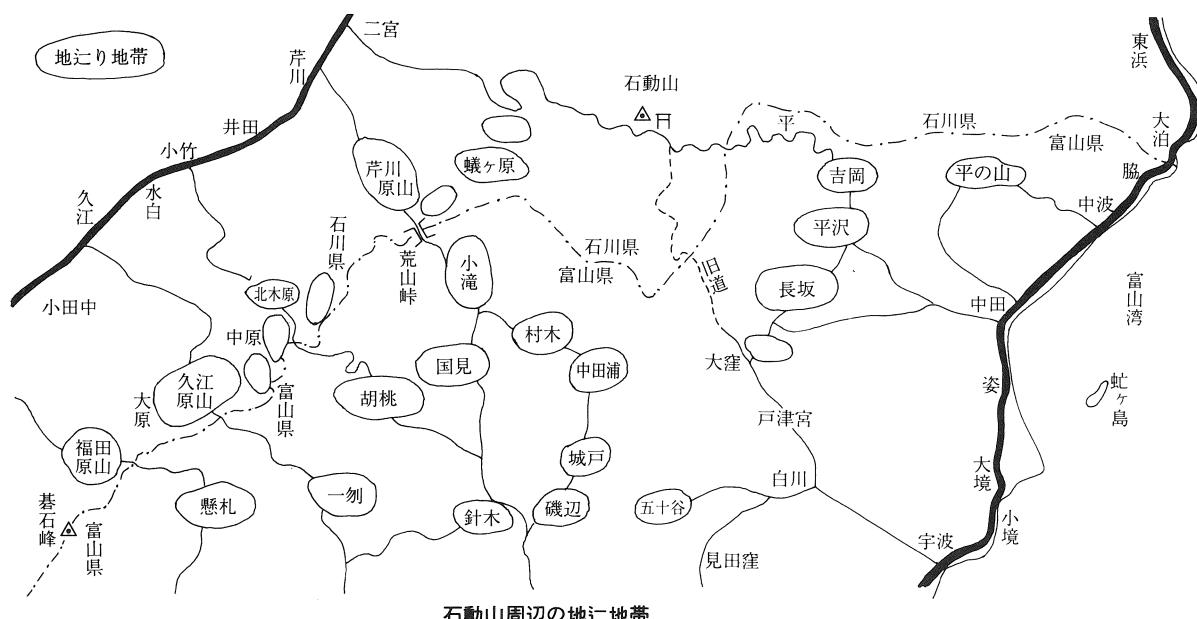
② 石動山という名称の由来については、太古の時代に天より星が落下して3つに割れ、朝字石・動字石・竹字石となり、そのうち動字石が石動山に落ちた。その時にこの山が震動したので、イシュルギ山→イスルギ山となったという古伝が一般に信じられている。しかし私見によれば、これはかなり古い時代に石動山僧徒がイスルギ山という地名に因んで作り出した地名説話であって、「石動山縁起」の冒頭に記されたために、世人に広く信じられるようになったものと思う。

朝字石・動字石・竹字石が日・月・星の精であり、宇宙万物の生命をつかさどる靈石であるという説話は、いかにも神秘的・神話的であって、事実とは受け取りがたい。星が落ちて動字石となったものならば、動字石は隕石でなければならぬが、実物はありふれた普通の岩である。

しかし、イスルギ山という名は、延喜式内社たる伊須流岐比古神社の鎮座より見て、古来からの山名であることはまちがいない。それでは石動山の名はどうして生じたか。私見によれば、この山塊に地辻りが頻繁におこって、そのため山が鳴動したので、イスルギ山・石動山の名がついたものであろうと思う。但し、太古のころの石動山というのは、現在いわれているような狭い範囲のものでなく、少くとも荒山峠から石動山（狭義）を経て、東方富山湾に没するまでの広い範囲の山塊をさしていたと考えたい。いわば「石動山脈」全体をさしていたであろう。それに似た例は立山である。大昔、立山とは立山連峰すべてをさしていたらしい。万葉集には立山について長歌・短歌が多く詠まれているが、その立山は現在言う立山（狭義）だけでなく、毛勝山・猫又山・剣岳・別山・立山・浄土山・薬師岳などをみな含んだ「立山連峰」をさしていたであろう、とする解釈は万葉学の定説となっている。

石動山周辺の山々（石動山脈・石動山連峰）は地辻り頻発地帯である。古来この地方には数限りない地辻りの伝承と記録が残っているが、そのうち明治大正以後の特に顕著なものを挙げてみよう。

- 氷見市国見地区において、大正6年5月19日、大正7年3月18日、大正8年3月14日に大地辻りが発生し、田地8ha、畠3ha、山林6haが崩壊し、数條の大断層が生じた。大なる断層は高低差40mに及んだ。また崩土によって谷が埋められ、一大溝水池が生じ、昭和10年頃まで残っていた。



○ 氷見市胡桃地区において、昭和39年7月16日大地辻りがおこり、全戸数87戸のうち、埋没および全壊が61戸、半壊6戸、解体20戸に達し、全村ほとんど潰滅した。また水田18ha、畑8ha、山林約30haが崩壊

した。

○ 氷見市五十谷地区において、昭和52年3月29日大地辻りがおこり、全7世帯のうち、住宅4戸、空家4戸、その他15棟が倒壊し、水田7ha、畑7ha、山林20haが崩壊した。

○ 氷見市角間（城戸・中田浦・村木）は戦前から戦後にかけてしばしば地辻りがおこり、戦後のものは大規模な防止工事によって大災害をくい止めることができた。その他、平ノ山（中波地内）、吉岡、平沢、長坂、磯辺、針木、小滝、吉滝などの各地において、明治から大正・昭和にわたって数多くの地辻りが発生し、大災害をひきおこした。（詳細は『胡桃地すべり災害誌』52頁以下参照）

以上列挙したのは石動山脈の南方山麓地帯（富山県側）の事例であるが、石川県側にも恐らく多くの事例があるに相違ない。その1例を挙げれば、石川県鹿島町久江村の久江原山の地辻りがある。ここでは、明治7～8年頃の鉢伏山の地辻り、同32年11月から翌年にかけての30mに及ぶ土地移動、同34年1月の耕地大崩壊、同37年3月から5月にかけての山林・田畠の大崩壊・大陥落があった。特に同年4月27日の大崩壊によって、家屋は悉く倒壊・埋没し、田畠山林の陥没おびただしく、その悲惨さは名状すべからざるものがあった。（詳細は『石川県鹿島郡誌』下編298頁参照）

最近刊行された『鹿島町史』資料編（続）上巻付図〔石川県鹿島町地質図〕によれば、福田原山・久江原山・芹川原山・蟻ヶ原などが、大規模な地辻り地形であることが表示されている。

太古以来、石動山脈周辺の山村の住民は、みな地辻り災害に悩まされ、その恐怖におびえてきた。無気味な音を立てて見る見る大地が亀裂を生じ、山岳・山林・田畠がずるずると辻り落ちてゆく。「動かざること山の如し」といい、堅固なことを大地にたとえる。その大地が割れ、大山が崩れ落ちる時の恐怖は何にたとえよう。その恐ろしさを表現したのが石動山の名のおこりでなかろうか。（1972年石川県立郷土資料館発行の『石動山の歴史と文化』展覧会図録2頁に、これと同趣旨の解説がある。）

地辻り多発地帯の山林の住民たちが、地辻りのおこらないことを神に祈るのは、人情の自然であろう。ところで、石動山脈の主峰である大御前（ピラミッド形の頂上部）は堅固な岩石で構成されていて、絶対に地辻りのおこらない構造になっている。山脈の周辺がみな地辻り多発地帯であるのに、石動山の頂上部のみが堅固不動の岩山であれば、山麓地帯の住民がこの堅固不動の岩山に神の姿を見、ここに神を祀り、この神に地辻り防止を祈るのは人情の自然であろう。石動山の神（伊須流岐比古神）は「地辻り除けの守り神」の性格を有するのでなかろうかと推測する所以である。

③ 石動山は農民にとって水源涵養の大切な山であり、生命の山であった。石動山脈は大きな山塊で、ここから多くの川が四方八方へ流下している。北方七尾市の方へは御祓川、東方富山湾の方へは熊渕川・下田川・宇波川、南方氷見市の方へは阿尾川、西方鹿島町の方へは二宮川・井田川・久江川・長曾川などが流下して、平野に出て田畠をうるおす。石動山塊は高さの割合に幅が広く奥行が深く、山頂・山中には雲霧が生じやすい。雲霧は雨となり渓流となり、平野を流れ耕地を灌漑する。特に主峰大御前は千古斧鉄を入れぬ原始林で覆われ、それを中心とする50町四方の地域は、神域・寺域として、古来伐採を禁じられてきたため、森林がうっそうと繁茂してきた。明治8年石動山々林が官有林に編入せられ、つづいて同39年、日露戦争記念に県有林の設置となり、以後一定計画にもとづいて伐採と植林が施工されて、面目を一新した。しかし主峰たる大御前の円錐形の山体は、ブナ・ミズナラ・イヌシデなどの自然林におおわれ、天然記念物として厳重に保護され、太古のままの姿を保っている。

山の神が同時に水源管理の神とされることとは、わが国古来の民族信仰である。延喜式神名帳大和国に見える、吉野水分神社、吉野山口神社、宇太水分神社、巨勢山口神社、葛木水分神社などは、水源と灌漑を司る神様であろう。相模国の大山阿夫利神社、加賀国の白山比咩神社、能登国の中須流岐比古神社も同様であると考えられる。

④ 石動山は漁業にとって大切な山であり、漁民にとって昔も今も親のように親しくありがたい山である。それは「山だめ」の目標に最適な山として利用されているからである。

富山湾は全般的に沿岸漁業がさかんで、海岸には何十統・何百統の定置網が張りめぐらされている。特に氷見海岸には盛んである。而してその網を卸す場所（位置）は厳重に規定されており、その位置が少しでも変動すると、前後の網からきびしい抗議がとんでくる。しかし海上は陸上とちがって、杭を打って位置を確定することができぬ。そのため「山だめ法」を使うのである。

2点を結べば1直線が固定する。2直線を延長すれば（平行線でない限り）必ず交点が固定する。これは幾何学の基本原理である。山だめ法はこの幾何学の原理を応用する。図を見られよ。陸上に目立つ山を

2つとり、A山・B山とする。海上に特定したい重要点をCとする。AとCを結ぶ線上の海岸の顕著な物件をDとする。BとCを結ぶ線上の顕著な物件をEとする。A B D Eは固定して不動であるから、AD線とBE線の交点たるC点も固定して不動となる。海岸線の顕著物件には、例えば、円照寺の御堂の屋根とか、九殿浜の松の木とか、藪田の寺のイチョウの木とか、いうようなものが選ばれる。

氷見海岸の山だめには、A山には大てい石動山が選ばれ、これを下山という（都に遠いから）。B山は一定せず、竹里山、宝達山、二上山、三千防山など、その場所に応じて適宜に採択される（都に近いので之を上山という）。下山に石動山が選ばれるのはなぜかというと、最高の山であり、山頂が尖っていて目標にしやすいからである。上山が一定しないのは、石動山のように好条件のそろった山がないからである。

山だめは定置網だけでなく、刺網や釣漁にも極めて大切である。刺網は平坦な海底では魚がかからず、海底の断崖の縁辺においてよくかかる。釣漁をする人は、魚群のよく集まる魚礁の位置をよく覚えておかねばならぬ。これら的好漁場の位置を覚えるには、山だめが必要不可欠である。また漁夫が一日の漁を終えて母港へ帰る時にも、また日本海や富山湾を航行する一般の輸送船にとっても、石動山は好適な指標となつた。

このように、漁夫にとっても、渡海船の船頭にとっても、石動山はありがたい山であり、親のように慕わしい山であった。

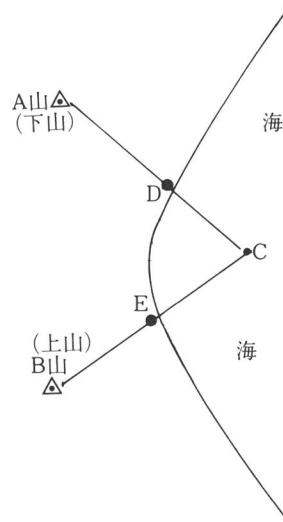
⑤ 最後に1つの仮説を付記する。参考意見としてお読みいただければ幸甚である。

石動山は氷見市の各地からよく見える。立山が越中各地からよく見えるのと同じである。而して氷見市の中心部（氷見町）からは石動山が真北にそびえて見えるのである。

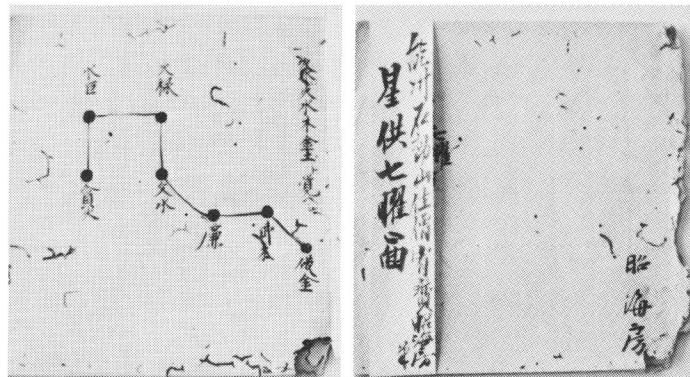
真北は北斗七星・北極星の輝く所であり、特に神秘感をそそる。北斗星は真北の方向を示す「導きの星」であり、古来、洋の東西を問わず、信仰の対象とされてきた。

天台密教では「北斗法」と称する最大秘法がある。別称「北斗供」「北斗尊星王法」ともいう。北斗七星の中心である北辰星、すなわち北極星のことを、諸星の王として尊星王と呼ぶ。北斗法は北斗七星すべてを供養して、息災（災害を息める）延命を祈る修法である。石動山にも北斗信仰が行われていたことを示す史料が最近発見された。それは『星供七曜図』という書物で、表紙には表題の傍に「能州石動山住僧宥宝昭海房筆」と記し、奥書には「能州石動山住僧宥宝昭海房、于時寛文十一年秋吉祥日」と記している（小矢部市石坂、中田修正氏蔵）。

星供（しょうぐ・ほしく）とは星供養の事で、日本国語大辞典によれば、「仏語。密教で息災・増益・延命などのために、本命星および当年星をまつ



山目要図



卷頭
表紙



星供七曜図

り、供養する法」とある。また佛教大辞典によれば、「天災地変の時、また個人の除災求福延命のために、七星・九曜・二十八宿を供養すること」とある。七曜とは日・月・火・水・木・金・土の七星をさし、一週間に配当されていることは小学生でも知っているが、古くは陰陽道や密教では、七曜とは北斗七星のことであった。北斗七星をかたどった紋所を七曜紋という。

『星供七曜図』は北斗七星供養に関する書物であり、巻頭には北斗七星の図が描かれているが、その内容は門外漢には難解でよくわからない。石動山古縁起『石動山金剛証大宝満宮縁起』の終りの方に、「当山大宝満宮相殿九神九曜星王在」とあるのが想起される。

この本は石動山の住僧が筆写したものであるが、そうだからといって、北斗信仰が石動山固有のものであるとは言えない。北斗信仰は密教・陰陽道では一般的に広く行われていたもので、石動山独特のものではない。比叡山でも高野山でも園城寺でも東寺でも、研究され実行されていたのである。

石動山が氷見市中心部から見て真北に当るからといって、石動山と北斗信仰とを結びつけるのは無理かも知れない。また氷見市以外の能登地方では該当しない話である。ただ氷見市からは、あまりにもぴったり真北に当り、偶然とも思われない気がするので、一言述べて参考に供する次第である。

北斗七星の中心である北極星を特にあがめて、「妙見菩薩」として信仰している靈場にも多いが、石動山には妙見信仰は見えないようである。(もし見つかったら御教示いただきたい)

「石動山縁起」には虚空蔵菩薩信仰にちなんで、明星信仰が顕著に表白されているが、明星信仰と北斗星信仰とのかかわりについては、今後の研究問題としたい。

「石動山信仰はどうして起ったか」について私見を述べてみた。①石動山は能登半島基部の最高峰であり、山形が円錐形をなしており、神体山の条件を備えていること。②石動山周辺は地辺り頻発地帯であり地辺り除けの神として信仰されたと推測されること。③農民にとって水源涵養の大切な山であったこと。④漁民にとって山だめの絶好の目標の山であったこと。⑤氷見市の中心部から見て真北にあたり、北斗星の方向にあること。以上は自然的条件であるが、それが隆盛になった人為的要因として、石動山衆徒が古代から中世にかけて、密教や修驗道の修行に難行苦行し、げんりき験力を身につけ、北陸七か国を廻国して熱心に説法し布教したことも挙げねばなるまい。

ところで上記の考察はすべて越中側（氷見側）から見たもので、能登側から見ればまた別の意見が出されるのは当然である。上記五カ条のうち、①③は能登・越中に共通の条項であるが、⑤は氷見独特の見解であり、②④も氷見側に顕著な条項であろう。能登側から率直な異議・異論が提出されることを、御期待申し上げるものである。

3. 越中における石動社の分布

全国における伊須流岐比古神社の分霊社の分布については、序章において述べた。その中で分霊社の多い県は、新潟県69社、富山県21社、石川県14社である。但しこの神社数は、現在宗教法人として登録されているもののみで、歴史の流れとともに合祀され廃絶されたもの、あるいは石動山の火宮・剣宮よりの勅請を伝えるものを調査し検出するならば、現在社数の3倍以上は容易に数えることが出来る。このうち越中の分について、やや詳しく調査し検出してみよう。

伊須流岐比古神社は、中古「五社権現」と称されていたので、江戸時代の神社台帳には末社の名も五社権現と記されていた。明治になって権現という称号は廃止され、五社の社、石動社、石動彦社などと改称された。また火宮社、火宮神社、剣社、剣神社という神社も、石動山の分霊社であると思われる。

越中の事例

『堂塔社人山伏并百姓自分ニ相守申品御尋ニ付書上帳』(正徳弐年) という長い標題の帳冊がある。略して『正徳弐年越中国社号帳』という。それが今のところ、越中四郡のうち、砺波郡となんみと射水郡いみずの分しか発見されておらない。いずれも未刊、写本である。この二冊について五社権現の所在をしらべてみよう。

まず砺波郡の分を調べてみる。合計十五社に上る。

五社権現

市野瀬村

五社権現

宮森村

五社権現

壹歩弐歩村

五社権現

頼成村

五社権現	篠川村	五社	三谷村
五社権現	柴野内島村	五社権現	芹谷村
五社権現	六家村	五社権現	正権寺村
五社権現	畠中村	五社権現	別所村
五社権現	下山田村	五社	西部金屋村
五社権現	東保村		

このほかに、今石動町の愛宕神社をぜひとも挙げねばならない。この町は藩政時代には町奉行の支配下にあった。上掲の『正徳二年砺波郡社号帳』は郡奉行支配下の神社のみを記載したものであったから、今石動町ものが記されていないのである。

今石動町は西砺波郡にあり、同郡最大の町であった。もと吉原村と呼んでいたが、天正十年能登石動山天平寺が滅亡した時、逃げのびた衆徒が虚空藏菩薩の像をここに遷し祀り、今石動村と改名した。のち人口増えて今石動町となり、明治以後は石動町と改め、終戦後は付近村落を合併して小矢部市と発展した。もと虚空藏菩薩像を祀って伊須流岐比古神社と号し、町民から崇敬されていたが、のち愛宕神社に合祀されて今日に至る。地名が神社名に由来することは京都の今熊野の如くである。(本陸本線にのり、金沢市から富山市へ向う時、富山県に入って最初の駅が石動駅である。)

次は射水郡の分を調べてみよう。(正徳20年の帳)

五社権現	土合村	五社大明神	下余川村
五社権現宮	下黒田村	五社大明神	長坂村
五社権現宮	横田村	五社大明神	戸津宮村
五社権現宮	懸開発村	五社大明神	白川村
五社大権現	一剱村	五社大明神	見内村

合計十社である。(当時の射水郡はのちの氷見郡、現在の氷見市もふくんでいた。)

石動山に近い射水郡に十社しかなく、遠い砺波郡に十五社以上もあるのは不思議である。そこで仔細に調べたところ、射水郡には、「火宮」「劍宮」が多いことがわかった。私見によれば、「火宮」は五社権現のうちの「火宮藏王大権現、大物主命、本地正觀音」であり、「劍宮」は五社権現のうちの「劍宮降魔大権現、市木島姫命、本地俱利伽羅不動明王」であろうと思うのである。つまり「火宮」「劍宮」は五社権現のうち一社を抽出したものと考えたい。

火宮は、井口本江村(二社)・東広上村・佐野村(二社)・須田村・上田子村・堀田村・太田村(二社)・耳浦村・十二町村(二社)・中波村・中田村・胡桃原村・大窪村・戸津宮村・角間村・粟原村・岩ヶ瀬村の26社である。秋葉社や愛宕社も火神を祀るが、ここには除いた。「日宮」と書いた中にも「火宮」と同じものがあるかもしれないが、ここには省いた。

劍宮は、木津村・下田子村・懸札村・七分一村・熊無村・長坂村・平村・矢田部村の九社である。これは石動山五社権現のうち一社を勧請したものに違いない。

越中四郡のうち、砺波郡の分は上述の如くである。のこりの婦負郡・新川郡の分は古い資料がないのでよくわからぬが、大正13年編の『富山県神社祭神御事歴』(富山県神職会編)によると、次の如くである。

(明治以後、神社の名称の変更、神社合併がさかんに行われたので、明治以後の神社台帳や祭神御事歴では元の姿がよくわからない。また祭神名なども時代による変化がはなはだしく、祭神名によって元の神社名を復元することは、一般的にいって困難である。)

下新川郡浦山村柄尾 村社石動彦社

婦負郡卯花村桐谷 無格社石動社今合祀

同郡	愛本村中ノ口	村社石動彦社	婦負郡卯花村笠原	村社石動社
上新川郡	蜷川村黒崎	無格社石動社合祀さる	下新川郡経田村西尾崎	村社五社之社
同郡	福沢村日尾	無格社石動社今合祀	同郡天神村東尾崎	村社五社之社
同郡	熊野村下熊野	村社石動社	同郡前沢村山田新	村社五社之社
同郡	大山村小原	村社石動社	同郡生地町生地	村社新治神社 ^{五社之社を合祀}
中新川郡	利田村五郎丸	村社石動社	同郡青木村目川	村社五社之社
同郡	上原村吉原	村社吉原神社旧称五社之社	同郡五ヶ庄村西草野	村社五社明神社
同郡	飯野村下飯野	村社五社之社	婦負郡四方町	村社四方神社 (元伊須流岐比古神社)

氷見市内の分霊社

江戸時代には氷見市（氷見郡）は射水郡の中に含まれていたから、上述の射水郡の分布の中に氷見市の分も入っているわけである。それを今一度抜き出してみよう。

一刹村	五社大權現	………(いま高階社という)
下余川村	五社大明神	………(いま五柱神社という)
長坂村	五社大明神	………(いま長坂神社という)
戸津宮村	五社大明神	………(いま父宮神社という)
白川村	五社大明神	………(いま松沢清助家で祭祀する)
見内村	五社大明神	………(いま戸宮五社という)

上記6社のうち、長坂村、戸津宮村、白川村の3社は、石動山登山路の表参道であった越中口（大窪口）に鎮座しており、注目に値する。すなわち、中世から近世にかけて、北陸7ヶ国のうち、加賀・能登・越中を除いた他の4ヶ国の信者や修験者たちは、遠路はるばる越中国氷見の里に到着し、白川・戸津宮・大窪を経て石動山に登拝したのであるが、嶮しい山路にさしかかる手前の、白川の五社大明神、戸津宮の五社大明神、長坂の五社大明神に参拝し、ゆっくり休息したのち石動山に登ったのであろう。これらの神社は、立山でいえば岩崎寺の前立社檀（雄山神社の里宮）に相当する。戸津宮という村名は外宮に由来し、石動山の外宮が鎮座したことから名付けられたのであろう。見内の五社大明神が「戸宮五社」と称せられるのも、外宮に由来するのでなかろうか。

長坂神社の拝殿は明治39年の造営で、三社権現造り、千鳥破風と唐破風とを併用し、総けやき造り、三手先組の堂々たる大社殿である。堂塔大工（宮大工）としてその技術の優秀性をうたわれていた大窪大工が、腕によりをかけて造営した会心の作であり、僻地には稀な豪壮な社殿である。また長坂神社所蔵の獅

子頭は、室町時代のものといわれる古いもので頗る大型であり、かつ偏平なもので、獅子舞に使ったものとは思われず、往古行道（法会の時、衆僧が列を組んで読経しつつ仏堂や仏像の周囲を、右廻りにめぐり歩くこと）に使用されたものと思われる。

父宮神社の天明6年の明細帳に、「永正二年に御鎮座、天正年中、前田利家様御立願御成就につき、弓と御紋



父宮社神（戸津宮）



長坂神社

つきの御幕御寄付になり、それより梅鉢の紋所を用う」とある。しかし永正2年(1505)は疑わしい。恐らく鎌倉時代にさかのぼるであろう。

江戸時代の神社台帳によれば、水見郡内に火宮が20社あり、剣社が8社あり、その鎮座地村名は既述した。これらは石動山五社権現のうちの、火宮・剣宮を勧請したものであろう。平村は石動山の東方2kmの山中にあり、石動山に最も近距離の村であるが、ここに鎮座の高坂剣主神社は、江戸時代は剣大明神と称し、その後明治10年までは剣之社と称した。平村に隣接する吉岡村の北山主神社は、江戸時代には火宮諏訪権現と称した。その隣村の平沢村の平沢神社は、江戸時代には火宮権現と称した。平・吉岡・平沢の各村は、みな石動山に最も接近した村々であり、伊須流岐比古神社(五社権現)の分霊社を祀ったのは当然のことであろう。

4. 小矢都市における石動山信仰

北陸本線に「石動」という駅があり、「いするぎ」と読まれ、難読地名の例としてよく取りあげられている。これは石動山信仰と深い関係がある。

この地にはもと吉原村と池田村の2ヶ村があったが、天正14年(1586)頃から「今石動」と改められ、明治になって「今」を除いて「石動町」と改め、さらに昭和37年8月、付近の多くの町村を合併して「小矢都市」に成長発展したのである。それでは吉原・池田の2村がなぜ「今石動町」と改名されたか。『小矢都市史』上巻、「今石動の名のおこり」の説明を引用しよう(259~261頁)。

天正10年(1582)前田利家は、当時多くの僧兵を擁していた能登の巨刹石動山天平寺を攻めたが、容易に落ちなかつた。同寺の淨寂坊の一族で、天平寺に出入りしていた七尾の町人水見屋勘右衛門は、この戦いにいつまでも前田勢に抵抗することは不利であると諭したので、天平寺側も和睦を申し入れるようになつた。前田側は和睦の条件として人質を要求したが、一山の衆徒は妻子を有せず、そのかわり最も信仰する伊須流岐比古命の本地仏である虚空蔵菩薩を差し出すことにした。天平寺は、一山の盛行院・宝伝院・觀行院・玄明院・済光寺の5人の山伏を付き添わせ、利家の弟秀継の居城である津幡城まで送り届けた。その後、秀継・利秀父子は今石動城へ移ったので、虚空蔵菩薩もこの地へ移した。吉原村には以前から愛宕権現があり、砺波の大社として社僧12坊、社人3人もおり、地方の信仰が厚かったので、虚空蔵菩薩をここに祀つた。社のあった地は今の城山公園の広場あたりで、俗に神主山といわれた所である。その後、今石動城の鎮護として、城の丑寅(北東)の方向にあたる今地へ移し、天平寺の信行坊・愛宕院から2人の山伏が来て、別当となつて奉仕した。そのため吉原・池田の地を「今石動」と改めた。今石動とは新しくできた石動山という意味であり、いするぎの呼び名は石ゆるぎの約まった言葉である。虚空蔵菩薩は明治元年に神仏混淆が禁じられたので、聖泉寺に譲られ、いまも同寺に安置されている。

上述の記事には大きな誤りがある。

天正10年に前田利家が石動山天平寺を攻めたことは事実であり、「荒山合戦」として喧伝され、『群書類従』(合戦部)には「荒山合戦記」が収載されており、史上有名な話である。しかし、「容易に落ちなかつた」というのは誤りである。前田利家は天正10年7月25日夜半に決死の勇士2600人をひきつれて居城たる七尾の小丸山城を出發し、26日早朝けわしい山路を登つて石動山に達し、朝霧たちこめる大森林の中の天平寺を急襲した。僧徒はさかんに護摩を焚いて敵徒調伏の祈禱を修していたが、突然の急襲に驚き、慌てふためいて防戦につとめた。しかし百戦練磨の前田勢に敵することができず、1000名の僧徒は討死し、七堂伽藍と僧坊は悉く焼き払われてしまった。すなわち、7月26日早晩に合戦がはじまり、同日午前中に戦争は終結したのである。(別に石動山僧兵の主力部隊は、かねてより前田勢との一戦を覚悟し、荒山峠に近い山上に荒山砦を築いてこれにたてこもり、合戦の準備をしていたが、金沢にいた佐久間盛政は前田利家の懇請によって応援にかけつけ、荒山砦にたてこもる僧兵の主力部隊と激戦し、これを撃滅した。これも26日午朝のことであった。)以上の荒山合戦(石動山合戦)の経過は、『石川県史』はじめ、多数の歴史書に記載されており、疑う余地は全くない。

「前田利家が石動山を攻めたが容易に落ちなかつた」という話が誤りであることは明白である。故に水見屋勘右衛門の調停もあり得ないことであり、人質の代りに虚空蔵菩薩を送つたという話も怪しくなる。

そもそも虚空蔵菩薩像は木像であり、仏師に命づれば同じ木像は何十体でも容易に作られるから、仏像が人質代りになるとは思われない。

それで諸書を参照してみると、『越中志微』（砺波郡の卷）の記事が最も信頼できると思われる所以で、次に引用する。

○貞享二年愛宕由来書に、能州石動山衆徒中間崩の時分、石動山虚空蔵菩薩を城山之社へ移し、二三年居住云々。然處前田又次郎殿御城郭に被為成、吉原村御城下に罷成に付、木舟町人共引越、御城下町成立。能州石動山權現御立有之に依て、今石動町と付申候。

○貞享二年の今石動愛宕寺の山來書を見るに、能登国石動山の衆徒確執の時、老僧の阿闍梨、石動山の本社宝満宮虚空蔵を持來、大宮へ安置し、其後今石動城となる時、城の丑寅に愛宕勝軍大權現・石動山權現両尊を一社に建立し、山号を今石動山と改むとあり。是、今石動の起りなりといへり。

○今石動阿當護社 貞享二年由來書に、砺波郡吉原村權現社。往古は城山に鎮座。砺波の大社にて、則南谷・北谷を宮嶋谷と称し、其時代社僧十二坊、社人三人有之。其地を神主山と称し、愛宕社に属し有之処、今時分石動山之畠分に属し、今以神主山と称す。先年能州石動山之衆徒中間崩の時分、石動山虚空蔵菩薩を此社へ移し、二三ヶ年居住。其後高徳公御分國と成、彼衆徒越後へ遁行罷在候処、御召直し、石動山へ復住。然處前田又十郎殿当地城郭に被為成。依之城山之社、丑寅の方へ被移、御建立。其頃愛宕・虚空蔵一社に被成、石動山坊宮之内信行坊・愛宕院兩人、当社別當に被仰付。(以上)

上記の『越中志微』の記事によれば、天正10年の石動山合戦の折に、石動山の長老の高僧が本社宝満宮の虚空蔵菩薩本尊を捧持して、砺波郡吉原村に避難して戦火をのがれ、御本尊を愛宕社に奉安した。その後、その土地が城郭の地となったので、愛宕社を丑寅の方へ移転し、1社の中に愛宕大權現と石動山權現の両尊を祀った。それで「今石動」の地名が生じたというのである。

石動町（旧郷社）愛宕神社

石動山の伊須流岐比古神社の本地仏虚空蔵菩薩を祀った今石動の分霊社は、愛宕神社に合祀された。

愛宕神社の鎮座地は小矢部市（旧石動町）八和町6の1。小高い丘の上にあり、108段の石段を昇りつめると宏壮なる拝殿の前に達する。境内は2033坪、このほかに今は駐車場になっている旧相撲場 364坪がある。拝殿は前口5間、奥行3間4尺、堂社造り、総けやき造り、瓦葺きの堂々たる社殿で、幕末の文久2年（1926）の造営である。拝殿には神楽殿と幣殿とが付属している。

祭神はつぎの4柱である。

- (1) 軒玖突智命（かぐつちのみこと）
- (2) 伊須流岐大入杵命（いするぎおおいりきのみこと）
- (3) 天照大神（あまたらすおおみかみ）
- (4) 火産神（ほむすびのかみ）

軒玖突智命は迦具土神とも書き、京都の愛宕神社から勧請した分霊で、防火の神、鎮火の神として信仰されている。

天照大神は伊勢神宮の御祭神である。もと今石動町吉田町神明社の祭神であったが、明治41年に愛宕神社へ合祀された。

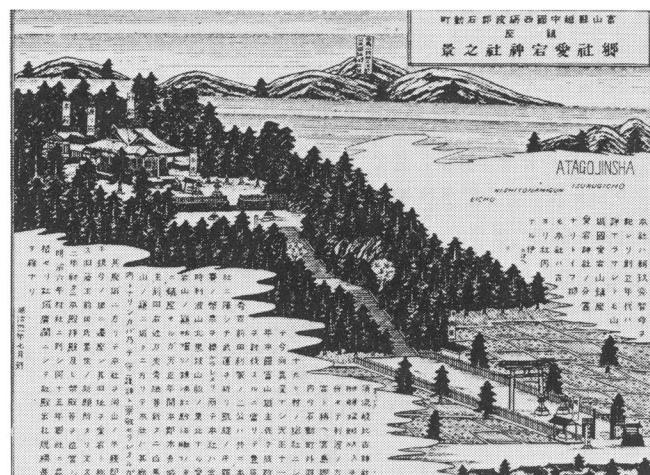
火産神はもと吉田町神明社の境内社たる秋葉社の祭神であったが、明治41年に神明社といっしょに愛宕神社へ合祀された。これも防火の神である。

伊須流岐大入杵命は石動山伊須流岐比古神社の祭神とされているが、これには若干の説明が必要である。伊須流岐比古命は石動彦命であり、石動山神社の祭神そのものである。しかるに中古、日本書記や古事記に出でていない神は權威がないという誤った考えが流行し、何とでもこじつけて記紀の神を祭神とするようになった。伊須流岐比古命は記紀に載っていない。大入杵命は崇神天皇の皇子で能登臣の祖なり、と古事記に出でている。それで『神名帳考証』の著者は、イスルギとイリキと語音の相近きを以て、伊須流岐比古神社は能登国造の祖大入杵命を祀ったものであろう、と提言した。その説に従って祭神名をそのように決定したのであるが、これはこじつけも甚だしい。イスルギとイリキとは大違ひである。伊須流岐比古神社の祭神は、伊須流岐比古神（石動彦神）でよろしいのである。

祭礼は、春祭は4月24日、秋祭は9月24日であり、春祭には神輿の町内御巡幸がある。故老の言によると、昔の御巡幸は大行列のようないかめしさがあり、氏子各町内にはそれぞれ役割があって、町内ごとに陣

羽織などの衣裳が備えてあったという。古来砺波の大宮と称えられ、また宮島郷、今石動町外49カ村の総社として、衆庶の尊敬帰依をあつめ、大祭礼にはあまねく休業して来集参拝し、祭礼見物をしたという。現在は御巡幸の行列は午前9時に神社を出発し、28町を巡幸し、午後3時に馬場御旅所に帰着する。氏子数は976戸である。（昭和55年9月、愛宕神社奉讚会発行『愛宕さん』による）

石動山合戦の折、今石動へ将来された虚空蔵菩薩木像は、永らく愛宕社に奉安されていたが、明治維新の神仏分離令によって、聖泉寺（真宗大谷派、新富町4番9号）に譲られた。この像は高さ27cm、膝幅19cmの木彫坐像で、室町時代の作といわれる。宝冠を戴き、右手に利劍、左手に宝珠をもち、小型だがすぐれた仏像で、小矢部市指定文化財となっている。（『小矢部市史』下巻805頁）



小矢部市石動町愛宕神社「越中宝鑑」より

5. 石動山ゆかりの古寺

石動山の極盛時代には、一山に360坊あったというが、それは誇張であろう。しかし話半分にしても大変な数である。この多数の寺院坊舎は、必ずしも山頂台地にあったものばかりではなく、山麓地方にも広く分布したものを含んでいたと考えられる。長坂には大づる坊・法信坊・かんちょう寺・不動などの地名が残っている。戸津宮には金剛堂・祓堂・寺屋敷という地名がある。吉岡にも寺屋敷・土用坊・太堂などの地名がある。これらの地名のある所は、かつての堂址・坊址を思わせるような平坦地であり、石動山ゆかりの社堂・寺坊跡と思われる。

このほか、灘浦海岸の村々（宇波・小境・大境・姿・中田・中波・脇・大泊・東ノ浜など）には、真宗寺院や浄土宗寺院があるが、その前身を調査探索すれば、かつては石動山天平寺ゆかりの寺院であったものが発見されるかもしれない。その事例を挙げてみよう。

光 西 寺

氷見市（旧女良村）長坂にあり、曹洞宗に属する。長坂は石動山東南方の山麓に位置し、山路を4kmほど登れば石動山の院内に達する。

貞享2年の由緒書上によると、「当寺開闢ハ、天正式年当村伊勢之助と申者發起ニ而建立仕、至當歳百拾式年ニ罷成候。寺屋敷ハ当村百姓中寄付仕罷在申候。越中射水郡長坂村曹洞宗、光西寺積応。」とある。

別に寺伝の沿革があり、これはやや詳細である。

〔光西寺沿革〕

禪宗曹洞宗で東旭山光西寺と称する。高岡市閔野繁久寺のわかれで、笑山宗間和尚を開山とする。開基は後醍醐天皇の後裔左衛門尉源伊勢之助である。創成は天正2年で、最初氷見郡飯久保の地に寺院を建立した。現在も光西寺屋敷と称せられる字がある。4世不谷順察和尚は、慶安元年に布教便宜のために長坂の字古寺の地に転住した。13世大鏡秀園和尚の時に不慮の火災にあい、堂塔伽藍悉く鳥有に帰した。現在の本堂庫裡は文化10年、15世礪磧道隆和尚の建立で、大窪大工高橋重左衛門吉矩の作である。（下略）

上記の「沿革」と貞享2年由緒書上とをいくら吟味しても、光西寺と石動山とが深いつながりがあったとは書いてない。しかしながら諸般の状況証拠によれば光西寺と石動山とは深い関係があったと推考されるの



光西寺（長坂）

である。結論を簡単に言えば、もと長坂には石動山の有力なる末寺があり、平・吉岡・長坂・平沢・白川地方がすべてその寺の檀家であった。しかるに天正10年（1582）の石動山合戦の影響によりこの古寺も兵火によって炎上し、衰微あるいは無住となった。長坂地方5ヶ村の檀家は頼るべき寺を失って途方に暮れた。ここにおいて源伊勢之助なる豪士が一念発起して、飯久保にあった禪宗光西寺を誘致移転させ、從来石動山系真言宗であった長坂地方5ヶ村の檀家を、悉く光西寺の檀家となし、禪宗に転宗させたのであろう、と推察するのである。

以下、その理由を述べよう。

① はじめに繁久寺について略述する。

繁久寺は現在高岡市関町にあり、仙寿山と号し、曹洞宗。永禄5年（1562）越中射水郡南条の飯久保城主加納中務の発起で、富山光嚴寺7世碓翁契播を招いて、同郡飯久保に堂宇を建立して飯久寺と号した。正保3年（1646）加賀藩主前田利常が寿樂亭を亡父前田利長の廟前に建て、廟守供養の寺となし、飯久寺4世骨州和尚を南条の地より招いた。骨州は利常の帰依を受けて飯久寺の寺号を繁久寺に改め、その住持となった。繁久寺は前田利長の墓守寺として今日に至っている。（『富山県大百科辞典』）

② 光西寺は繁久寺を親寺とし、その末寺であったが、正保3年（1646）に繁久寺が高岡へ移つて2年後



天文3年在銘一石五輪塔

（長坂　光西寺）

慶安元年（1648）に長坂へ移った。この時、源伊勢之助が誘致に尽力したことは「未練坊伝説」によって推察できる。これは伝説であって、史実か否かは不明であるが、郷土の人々に長く語り伝えられた有名な伝説であるから、参考にする価値がある。その詳細は「伝説」の項を参照していただきたいが、大要を述べると、伊勢之助が里人に危害を加えた妖怪（実は老猿）を退治した時は、老猿に首にかぶりつかれて死にそうになった。その時伊勢之助は老猿に歎願して曰く、「余は長坂のため、光西寺開創の事を初め、なきねばならない数多くの事業が残っているので、此處で落命するわけには行かない。もし汝は余に討たれたまま死んでくれるならば、余は子々孫々に至るまで、我家の守護神として汝を崇敬するであろう。どうか余の命を長らせさせて、残した事業を完成させてくれ。南無石動山五社大権現、余の願いを叶えて靈感を垂れ給え。」と。すると不思議にも老猿はかみついた首を離して、がっくり頭を垂れて死んでしまったという。（『修師語録』による）

この伝説により、伊勢之助が命がけで光西寺の誘致に尽力したこというかがわれる。更に考察すれば、妖怪（老猿）が人間にかみついて死に至らしめるということは、現代では考えられぬことであり、老猿が人間と問答することもあり得ないことである。してみると、この妖怪とは石動山系の荒法師で、自分達の縄張りを犯した侵入者に、危害を与えたことを、象徴的に表現したものでなかろうか。未練坊という名前も、石動山の荒法師の名を思わせるではないか。

③ 光西寺が移転した長坂の境内地の付近に、「古寺」という地名のついた土地がある。この土地からは天文3年（1534）の銘のある一石五輪塔が発見された。また寺の近くの藤井家の墓地にも、同じく天文3年銘の一石五輪塔が見つかった。これらによって、長坂にはずっと以前から石動山系の真言宗寺院があったことが推察される。

④ 密教寺院（天台・真言系）から禪宗に転宗した事例には、曹洞宗大本山総持寺の例がある。総持寺は現在、横浜市鶴見にあるが、明治40年までは奥能登門前にあった（現在はここに壮大なる別院がある）。ここには元、諸岳寺といふ密教寺院があったが、鎌倉時代の終り頃、永光寺の堂山和尚に寺を譲り、曹洞宗（禪宗）総持寺に改めた（佃和雄『能登総持寺』による）。真言宗から真宗に転じた寺は非常に多い。

⑤ 光西寺のある長坂をはじめ、その付近の村々には光

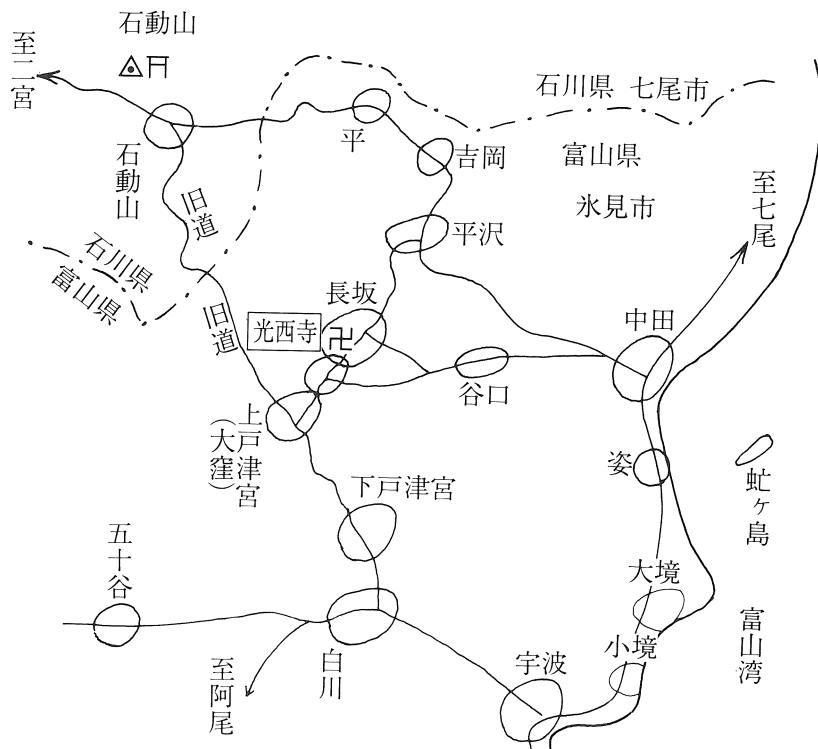
光西寺檀家分布（長坂近村のみ）

村名	全戸数	光西寺檀徒	その他	%
長坂	70	68	2	97
平沢	28	27	1	96
吉岡	15	12	3	80
平	19	19	0	100
谷口	13	7	6	53
白川	100	50	50	50
下戸津宮	47	10	37	21
上戸津宮	26	4	22	15

（全戸数、檀家数には年により若干の変動がある。）

西寺檀家が甚だ多い。中でも長坂・平・吉岡・平沢の4カ村は、100%に近い檀家率である。これは、それまで天平寺末寺の檀信徒であったものが、そっくりそのまま光西寺檀家に転じたものと見るべきであろう。そのせいか、光西寺檀家は禅宗でありながら、真言宗系の石動山天平寺に対しても深厚なる親愛感と尊敬心とを持ちつづけている。

光西寺近傍村落図



白川は全戸 100戸のうち、光西寺檀徒が半分、残り半分の半分が氷見町曹洞宗光禪寺檀徒である。つまり白川の3/4が禅宗(曹洞宗)の檀徒である。上戸津宮・下戸津宮に光西寺檀徒が少いのは意外である。上戸津宮には浄土宗大榮寺檀戸が6戸、浄土真宗が14戸、光西寺が4戸である。下戸津宮は大榮寺が13戸、光禪寺が9戸、光西寺が10戸、浄土真宗が19戸である。両戸津宮には大榮寺檀徒が多い。

⑥ 光西寺には石動山伝来品、あるいは伝来と称せられている品物（仏具、仏像、仏画、石碑、石塔、調度品など）が甚だ多い（　　頁参照）。これも光西寺と石動山との因縁の深さを物語るものであろう。

〔結語〕 要するに、光西寺はもと飯久保にあったが、慶安元年に長坂に移り、もとそこにあった石動山末寺の真言寺院の檀徒を、そっくり受継いだものと推測されるのである。

〔畧年表〕 天文 3 年 (1534) 在銘の一石五輪塔が光西

寺と藤井家墓地にあり。

永禄5年（1562） 飯久壽創立（飯久保）

天正 2 年（1574） 光西寺創立（飯久保）

天正10年（1582） 石動山合戦

慶長 2 年 (1597) 76坊が伊掛山より石動

山へ還住

正保 3 年（1646） 飯久寺が高岡へ移り、

繁久寺と改号

慶安元年（1648）　光西寺、長坂へ移る

大榮寺

この寺は小境村の海岸の高台にあり、浄土宗の名刹、後醍醐天皇第8皇子宗良親王が滞留されたという伝説がある。2層の山門をくぐると広い境内の奥に宏壮な本堂があり、背後には森林うっそうと茂り、高燥清浄の靈地である。貞享2年(1685)の由緒書には次のように記している。

1. 当寺開闢者、休安良國上人建立ニ而御座候。年号知不申候。但貞和三年正月十日ニ遷化仕申候。其々以来至当歳、三百三拾九年ニ罷成申候。

1. 人皇第九代開化天皇御宇三、天竺摩河陀國方道仙人、七百歲之時、日本來、此地三久住住申候。

人皇十一代垂仁天皇第一皇子譽津別尊三拾才迄無言ニ而御座候を、此方道仙人勅を受、仙法ニ而初而

あれなんやと出音被成候。如此地を良國上人草創仕、小境山墓王大円寺と申候。二代紫栄上人、後醍醐天皇御重祚祈誓申、其節紫衣を被下、其上名号御所持之舍利被下、于今所持仕候。此紫栄上人遷化以後百拾七年、代々知レ不申候。其以後真良庵光国土人永正十五年二入寺仕、当寺之中興開山ニ而御座候。(後略) (『加越能寺社由来』上巻 395頁)

この由緒書によれば、当寺の開山は休安良國上人で、貞和3年(1347)正月10日に遷化された。第9代開化天皇の御宇に、インドの方道仙人がこの地へやってきて、久しく居住した。そして第11代垂仁天皇の皇子誉津別命の啞を、仙法で治癒せしめた。この由緒ある靈地に良國上人が一寺を創建され、小境山墓王大円寺と称したという。(以下省略)

この伝承に従うと、方道仙人と大栄寺とは直接につながらない。方道仙人が誉津別命の啞を仙法で治癒せしめた説話は、石動山縁起をそのまま借用したものである。なぜ借用したのか。大栄寺より1kmほど西北の山中に大寺山があり、この山頂より少し下った山中の平坦地が大円寺の旧跡地といわれる。その谷間には行者水という清水が岩間から湧き出ており、付近には小堂の敷地らしい丘が3~4カ所あるという。(『灘浦誌』164頁)察するに、昔ここに石動山関係の末寺か、修験者の道場があった。そこに休安良國上人が浄土宗の大円寺を創建され、のちに海岸の現在地に移り、大栄寺となつたのであろう。この寺は石動山の末寺ではないが、曾ての末寺道場の跡に大円寺を建てたという因縁から、方道仙人伝説をそっくり借用したものと思われる。

次に髪塚について考えたい。

大栄寺から700mほど北方、灘浦中学校の背後の丘の上に、宗良親王の髪塚と称する石碑がある。宗良親王が勤王の義軍を募るために、越後の海岸から船に乗ってきて越中小境の浜に上陸され、大栄寺に滞留されたが、皇威振わず、剃髪して仏門に入られた。その髪を埋めた塚の上に建てたのがこの髪塚石碑であるという。それは高さ2mに及ぶ大型の自然石板碑であり、「貞和三年□□十五日」の文字と、釈迦如来をあらわすバクという梵字が彫ってある。しかし、これは宗良親王の髪塚でなくて、大栄寺開山良國上人の墓碑か供養碑であろう。その理由は、①宗良親王の髪塚ならば南朝年号の正平2年を使うべきに、北朝年号の貞和3年を使用している。②良國上人遷化の年は貞和3年であり、髪塚の銘記と同じである。③貞享2年の大栄寺由緒書には宗良親王の話は全く書いてない。④宗良親王は興国2年(暦応4年)には越後寺泊にあり、同3年は越中奈呉浦(新湊市)にあり、同5年には信濃大河原に転戦せられ、剃髪出家して静かに仏道を修める余裕はなかった。髪塚の銘の貞和3年(正平2年)の頃は信濃・駿河に滞在されており、越中とは関係のない時代であった。(市村威人『宗良親王』174、317頁参照)李花集によって宗良親王が越中に滞在されたと明記のあるのは興国3年(康永元年、1342)の頃であり、髪塚の銘は貞和3年(正平2年、1347)であり、5年の差がある。

しかし大栄寺(大円寺)と石動山とは無関係であったとは考えられない。当時南朝方は形勢不振を挽回するため、各地の修験道の大道場や山岳寺院を味方にひき入れ、その僧兵集団の武力をかりて武家方に対抗せんとした。吉野朝廷は金峰山(大峰山)の僧兵集団の援護なくしては存立し得なかった。石動山衆徒が建武2年(1335)、能登の国司中院定清に味方し、足利方の越中守護普門利清の軍勢と戦い、一山炎上し壊滅したのも、この事情を示す証拠である。こういう時代において、修験者(山伏)は山林修行しながら全国の靈山道場を遍歴して歩いたから(これを斗撒行といふ)、オルグ活動・スパイ活動をするには最適任者であった。石動山衆徒は建武2年の兵火の後も永く南朝方に心を寄せていたから、南朝方のオルグがしばしば石動山を訪れたことは推測できる。その時、小境浜はオルグ達の着船地であり、大円寺(大栄寺)はその隠れ家となったのであろう。オルグには山伏もいたであろうし、山伏に変装した南朝の皇子もあったかも知れない。小境・脇方・宇波・白川地区には、南朝関係の伝説地が甚だ多いのも、このことを裏書きするものではなかろうか。しばらく記して後考に備える。



大栄寺(小境)

千光寺

砺波市芹谷の芹谷山千光寺は真言宗の古刹で、寺伝によれば開基は天竺（インド）の法道上人（円徳）であり、三論宗に属していたが、空海が再興して真言宗に転じたという。加賀藩2代前田利長の時、寺地を拝領し、後に加賀藩の祈禱所となった。度重なる火災のために多くの記録を焼失し、中世以前の歴史は不明である。本尊の銅造聖観音菩薩像（丈39cm）は白鳳様式を今に伝えて、同寺の古さを物語っており、県指定の重要文化財である。本堂たる観音堂もまた豪壮な大加藍である。貞享2年（1685）の由来書には次の如く記されている。

芹谷山千光寺開闢者、大宝三年唐僧円徳上人之建立。至当歳九百八十三年二罷成候。本尊正観音秘仏ニ而、唐鑄金躰之由申伝候。山林持來、唯今以別當職相勤候御事。（後略）

円徳上人とはいかなる人か。寺に伝わる「越之中洲般若野芹谷山千光寺縁起」によると、円徳上人とは法道仙人と同じ人だという。この縁起は長文であるから、要約すると次の通りである。

「開基は中天竺の僧法道上人（円徳または道明比丘）であり、神仙の術を体した仙人であった。勇躍して日本に渡來し、諸方を歴訪して廻ったが、越中般若野の東方に瑞雲がたなびいているのを見た。そこへ神様が現れて、法道上人を導いて山間の平地を下し、此處に寺を建立すれば必ず神威が興隆しまた仏教は盛んになるだろうといって、そのまま昇天された。上人はこの地蓮花谷にとどまって草庵をつくり、尊像を安置し、仏教の道場とした。これが千光寺のはじまりで、大宝元年（729）である。」（『砺波市史』209頁）

法道上人には4人の門弟があり、智徳・仙祐・道勝・道仙で、みな百濟からの僧であり、何れも傑出した僧侶で、越の四傑とさえいわれた人々である。智徳上人は法道没後、千光寺第2世として後をついだが、天平元年のころ、能登国巽峰に登って百日の修行をつんだ。この峰を石動山と名づけたという。

さてこの芹谷山千光寺の守護神として、古来五社神が奉祭されていた。「芹谷山五社入法繼襲記」によると、当山には四方鎮護のため、境内に五社神の祠があった事が記されている。五社神とは次の五柱の神である。

1. 藏王火宮………神としては大物主命、仏としては聖観音、
1. 大宮………神としては伊弉諾尊、仏としては虚空藏、
1. 鷺尾白山宮………神としては伊弉冉尊、仏としては十一面觀音
1. 劍宮鷺尾權現………神としては市杵島姫尊、仏としては不動明王
1. 梅宮良和權現………神としては天目一箇神、仏としては勝軍地蔵、（『砺波市史』221頁）

千光寺縁起と石動山縁起とくらべると、甚だよく似ている。開山円徳上人と法道（方道も同じ）仙人とは同一人物である。千光寺2世智徳上人は石動山では開山に準ずる人となっており、『拾芥抄』では石動山の草創者としている。五社神というのも石動山五社權現とほぼ同じい（小異はあるが）。

以上を通観すれば、千光寺縁起は石動山縁起をまねたものと言えよう。（ただ動字石については触れていない）。どうしてこういう模倣がおこったか。恐らく、千光寺は古代において石動山の末寺であったのであろう。それが後世になって分離独立した折に、このような模倣縁起が作られたものと思われる。

光誓寺・聖満寺・常尊寺・覚照寺

光誓寺は氷見市柿谷にある真宗本願寺派の寺院もある。その由緒によれば、往昔、石動山末寺東万寺より出た西願なる僧が、はじめ戸津宮大窪に草庵をつくり真言宗を奉じていたが、本願寺第9世実如に帰依して浄土真宗に改め、後に実如より方便法身尊像（阿弥陀如来絵像）を賜わり、柿谷に移って坊舎を営んだのが光誓寺のはじまりという。現在も大窪の高田秀雄家の近くに御坊屋敷があり、今も同家を光誓寺の本家と称し、報恩講出向の際には手土産持參を例としている。光誓寺住職の姓は高田である。（『上庄村史』80頁）

聖満寺は氷見市宇波にあり、真宗本願寺派に属する（住職は安居公昭）。貞享2年の由緒書によれば、文明13年（1481）に専順という僧が開創したとある。安居孝成家の伝承によれば、当寺はもと石動山天平寺の末寺であったが、いつの頃からか寺門を弟に譲り、兄は禄高50石を得て百姓となった。これが現在の安居孝成家であるという。口碑によれば、聖満寺はもと真言宗であったため、宇波村でもと石動山戒定院の檀徒であった孫右衛門・孫三郎・儀兵衛・嘉右衛門の諸家は、戒定院復飾とともに当寺の門徒となったという。（『灘浦誌』131頁）

常尊寺（住職段證誠也）は氷見市宇波にあり、真宗本願寺派である。貞享2年の由来書によれば、慶長15年（1610）に慶順という僧が創建したという。里伝によれば、当時はもと石動山にあり、谷野家の祖先とともに脇方へ下って寺坊を営み、後に宇波の現在地に移ったという。

常尊寺はもと脇方にあったというが、脇方には仏教関係の地名が非常に多い。高い丘陵上にある今蔵神社の近くには、道心寺・高寺・曼陀羅寺・東満寺の地名がある。今蔵神社はマンダラ坂を登りつめた所に建っており、現在この坂から小境村に至る旧道が残っている。さらに谷内の丘陵上、浅野喜一家の背後には、7個の板碑（供養碑）があり、うち4個は高さが1mもある大型石碑で、中世の古い型式のものであり、貴重な信仰遺物である。（『灘浦誌』132、145頁、及び実地調査による。）

覚照寺（住職北野義照）は氷見市指崎にあり、真宗大谷派に属する。貞享2年の由来書によれば、文禄4年（1595）に淨誓という僧が建立したと記すが、寺伝によればもと石動山の末寺で、来光寺という真言宗寺院であったという。今も指崎の奥山に来光寺山という所があり、雑木林の中に堂宇の跡と思われる小平地がある。そこには拳大の玉石が100個ばかり積み上げられてある。こんな玉石はこの山には絶対にあり得ない石で、信仰上の目的で他所から運ばれてきたものと思われる。毎年お盆が近づくと、覚照寺では夏草の茂る山路をかきわけてこの玉石塚へ行き、墓掃除のように丁寧に除草清掃するのを恒例としている。この玉石塚は先祖のお墓であろうか。この清掃は先祖代々の慣例として今も励行されている。この山道は長さ1km、歩いて20分ほどかかり、今は草木が生い茂って歩行が困難な程であり、道を知った人でなければとても行ける所でないという。来光寺山は北八代村に接している。北八代村は中世の石動山の表参道たる越中口（大窪口）の入口の村である。すなわち来光寺山は越中口の入口にあったのであり、ここに石動山の末寺があっても不思議でない。覚照寺の山号は来光山と称する。

結びにかえて

射水郡作道村（いま新湊市）の故齊藤俊彦氏は、戦前県会議員を3期つとめ、戦後新湊市長（昭和30年7月～34年7月）にも就任されたが、昭和41年に逝去された。御令息は齊藤靖彦氏で、現在は富山市に居住している。

齊藤家は旧藩時代より代々十村役をつとめた旧家で、初代左兵衛（寛政一文政）、二代庄五郎（文政一安政）、三代甚兵衛（天保一元治）、四代庄五郎（安政一明治）などの履歴は、『射水郡十村土筆』に詳しく記してある。

当家には旧藩時代の民政史料が豊富にある。曾って故俊彦氏の御好意により拝見したものの中に、石動山の神仏分離の際の史料があった。これは石動山が神仏分離令によって一山離散の運命に陥った時、自坊の仏像の処置に窮し、民間篤信の方に預託を懇請したものである。

未得御意候得共、一書致啓上候。兎角氣候不順ニ御座候共、益々御安祥御勤務之由、大幸之至ニ奉賀候。

然者從來信仰之薬師如來尊像安置致居候処、今般御一新之折柄、一同復飾之御趣旨、不得止改名いたし候ニ付、仏像等取除方、甚以心配罷在候。然処、過日上野村孫兵衛殿登山ニ付、彼是嘶合候処、貴家御宗旨真言宗ニ候故、右尊像彼方へ被預候ハハ、定而御供養方行届候哉の旨、具ニ承之申候。就而者長ク御預申度候。尤、宮殿も高サ四尺斗有之、大都六人持位ニ御座候。若御招請被下候ハハ難有存候。依而御答待申候。猶委曲、使の者江申置候條、不能一二候。恐々謹言。

七月十五日 前仏藏坊更改名

岡崎中務

齊藤庄五郎様

この手紙には年号が入っておらぬが、天平寺解散の記録よりみて、明治2年のことと思われる。この依頼状に対して、齊藤家は許諾したか謝絶したかは不明であるが、当主靖彦氏はそういう薬師像は見たことがないと言われた。齊藤家は信心あつい家であつたらしく、年々の石動山よりの知識米勧進僧訪問を受けた記録、及び伊勢神宮の御師たる山川二見太夫や檜垣越中などの書状も数点あった。

もっとも之は齊藤家の信心の厚薄如何にかかわらず、十村役として、石動山勧進僧や伊勢御師の周旋をしなければならなかつたからであろう。十村役として石動山勧進僧の周旋をするのは、加賀藩の十村がみな背負わされた任務であったが、薬師如來像その他の仏像の預託を依頼されたのは、稀有な例ではあるま

いか。

石動山と越中との関係を長々と叙述して、最後に薬師如来像預託の依頼状を紹介し、以て結びにかかる。一千年間にわたり、石動山五社権現の名は北陸地方にとどろいていたが、一たび神仏分離令が出るや、忽ちにして石動山は瓦解し離散することになった。万物流物、諸行無常とはいいながら、うたたものの哀れを感じざるを得ない。

[追記] 八代仙びらき

明治の終り頃まで、毎年7月1日、八代仙開きの祭りが執行され、能登部の神主清水丹波様がこられて奉仕された。八代仙は角間村の加久麻神社から4町ほどはなれた奥山にあり、伊須流伎比古神社の飛地境内になっていた。7月1日の祭礼の1週間前頃から全国の行者が多勢あつまってきて、行（ぎょう）をした。御岳教・月山教などの行者が、さまざまな祝詞・経文を読んでいた。八代仙はその頃は大岩屋で、その岩窟の中に板を敷き、ござを敷き、筵を敷いて、大勢の行者が寝起きしていた。一般信者も、宇波・戸津宮・五十谷・白川・角間・大窪などの村々から大勢参詣して、大へん賑わったものである。

その後この大岩屋は地震でつぶれてしまい、大正以後はこの祭礼もすたれてしまった。（昭和38年9月24日、加久麻神社宮司、故高坂美範氏より聞書す。筆者橋本芳雄）